

雪

ワキ

シテ

旅僧

雪の精

地は

摂津

季は

冬

「末の松山はるぐと。く。行方やいづくなるらん。

詞  
「是は諸国一見の僧にて候。我此ほどは奥州に候ひしが。又思ひ立ち津の国天王寺へ参らばやと思ひ候。

道行

「墨染の。衣ほすてふ日も出でゝ。く。そなたの雲も天ざかる。鄙に馴れゆく旅の空。野に伏し山を分け過ぎて。是ぞ名におふ津の国や。野田の渡

りに着きにけり。く。

詞

「急ぎ候ふほどに。是は早野田の里とかや申し候。

あら笑止や。晴れたる空俄に曇り。雪ふり東西を弁へず候。暫く此処にて雪を晴らさばやと思ひ候。

シテ

「あら面白の雪の中やな。曉梁王の園に入れば。雪群山に満とり。夜庾公が樓にのぼれば。月千里に明らかなり。我も真如の月出でゝ。妄執の雪消えなん法の。恵日の光りを頼むなり。

ワキ「不思議やな是なる雪の中よりも。女性一人顕はれ給ふは。いかなる人にてましますぞ。

シテ「誰とはいかで白雪の。唯おのづから顕はれたり。

ワキ「誰とは知らぬ白雪とは。さてはお事は雪の精か。

シテ「いやさればこそ我姿。知らぬ迷ひを晴らし給へ。

ワキ「さては不思議や雪の女に。言葉をかはすも唯これ法の。功力を疑ひ給はずして。とくく成道なり給へ。

シテ「あら有難の御事や。妙なる一乗妙典を。うたがふ心は荒金の。

地「地に落ち身は消えて。古事のみを思草。仏の縁を結べかし。我とはいさや白雪の。積る思ひはいやましに。有明さむみ夜半の月。

シテ「峰の雪汀の氷ふみ分けて。

地「君にぞ迷ふ道は迷はじな。津の国の野田の川波高瀬漕ぐ。袖の柵ひぢまさり。岩にせかるゝ沖つ船。

やる方もなき我心。浮べ給へや御僧と。月にひる

がへす花衣。實に廻雪の袖ならん。

シテ「朝ぼらけ。野田の川霧絶えぐに。

地「あらはれわたる。

シテ「姿もさすが白露の。

地「姿もさすが白露の。峰の横雲。

シテ「立ちのぼるしのゝめも。

地「明けなば恥かし。暇申して帰る山路の。梢にかゝ

るや雪の花は。又消えくとぞなりにける。